

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520067

研究課題名(和文) インド哲学文献に見る言葉の意味をめぐる論争史

研究課題名(英文) A historical study of Indian theories of semantics

研究代表者

片岡 啓 (Kataoka, Kei)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60334273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：インド仏教論理学における語の意味の理論については、近年、資料状況が変わりつつあり、それに伴い従来の研究を見直すべき時期に来ている。報告者は、仏教の伝統の外側から仏教の意味論を見直すために、報告者自身がサンスクリット語写本に基づき批判校訂した『論理の花房』(紀元後9世紀後半頃)というバラモン教文献に基づきながら、そこにおける仏教説批判を詳細に検討することを研究課題とした。研究成果の中心となるのは、『論理の花房』における語意論、特に、仏教説批判の箇所である。三篇の訳注研究を発表するとともに、関連する研究論文五篇、および、批判校訂一篇を学会誌・紀要に掲載した。

研究成果の概要(英文)：Textual sources newly available in recent years encourage us to reconsider the history of Buddhist semantics and related issues. The present researcher edited the Nyayamanjari, a Brahmanical text, on the basis of Sanskrit manuscripts. The author, Bhatta Jayanta, criticizes Buddhist theories and thus provides us with a lot of information. Three articles, i.e. annotated Japanese translations of the Nyayamanjari, are published in the faculty annual as the main results of the three-year research. Five research articles and one critical edition are also published in research journals, etc.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学，印度哲学・仏教学

キーワード：仏教論理学 nyaya apoha Nyayamanjari Jayanta アポーハ ジャヤンタ Dharmottara

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2009年にOle Pindによるディグナーガの意味論の研究(ウィーン大学提出の博士論文)がインターネット上で公開された。従来、ディグナーガの『集量論』第五章の「アポーハ論」については、精度の高くないチベット語訳二篇が残るのみであった。また、ジネンドラブッディの注釈についても、チベット訳が残るのみであった。Pindの研究は、近年中国より発見されたジネンドラブッディの注釈のサンスクリット語写本に基づくものであり、ディグナーガのアポーハ論に関して、サンスクリット語のオリジナルの復元を高度に可能ならしめるものである。Pindは、ジネンドラブッディのサンスクリット語テキストから『集量論』のサンスクリット語テキストを可能な限り復元するとともに、英訳を付し、また、註において多くの関連資料(例えば他テキストにおける『集量論』断片の引用)を挙げている。仏教論理学における「アポーハ論」の最初の資料が、現物そのものではないにせよ、かなりの精度で復元されたことは、アポーハ論史を見直すうえで画期的な事件であった。

(2) アポーハ論の研究は、1930年代のフラウワルナー、サトカリ・ムカジーによる研究を嚆矢として、日本でも、服部正明、桂紹隆、赤松明彦など、京都大学の研究者を中心に、多くの研究が、1980年代前後に積み重ねられてきた。サトカリムカジーを始めとした第一期の見方は、第二期の研究により訂正を受け、赤松明彦が明示したアポーハ論の発展史の史観が現在学界で認められるようになっていく。それは、資料としては、紀元後1000年頃のジュニャーナシュリーミトラやラトナキールティの見方を基礎に据えたものである。ダルマキールティの見解が、肯定論のシャーンタラクシタと否定論のダルモッタラに分岐し、そして、最後に折衷論のジュニャーナシュリーミトラとラトナキールティにより再び総合されるという見方である。

(3) ラトナキールティにより「否定論者」とされる仏教論理学者ダルモッタラの見解については、これまで、フラウワルナーによるチベット語テキストの校訂および独訳、そして赤松明彦による研究論文があるのが主な先行研究であり、それ以上の研究の進展は見られていない。服部正明は近年、ジャヤンタの『論理の花房』のアポーハ論の箇所を紹介し、その中で、そこに紹介されるダルモッタラ説にも触れている。『論理の花房』は、サンスクリット原典の失われたダルモッタラ説を再構成するにあたって貴重な資料となりうるのである。

(4) Pindの博士論文の公開と前後して、世界的にもアポーハ論研究の見直しが始まっている。Mark Siderits, Tom Tillemansを中

心とした欧米の研究者による研究である。2006年に国際研究集会が行われ、成果は、Apoḥa: Buddhist Nominalism and Human Cognitionとして2011年に出版されている。Parimal Patilなど新たなアポーハ論研究者も加わり、ここにアポーハ研究の第三期が始まったと見ることができる。

## 2. 研究の目的

(1) アポーハ論は、紀元後500年頃のディグナーガ以降、クマーリラやダルマキールティを経て、シャーンタラクシタ、ダルモッタラ、カマラシーラ、ジャヤンタ、スチャリタ、ヴァーチャスパティミシュラ、ジュニャーナシュリーミトラ、ラトナキールティなど、紀元後1000年に至る現存文献資料に確認されるように、長く活発な論争の歴史を有する。仏教史および、それと密接に関わるバラモン教およびインド思想史を見る上で、アポーハ論の論争史は、重要な考察資料を提供する。

(2) 報告者は、仏教論理学とバラモン教の論争史を主題として研究してきた。バラモン教の側から仏教論理学を見直す作業を続ける中で、バッタ・ジャヤンタの主著である『論理の花房』の校訂作業を行い、ジャヤンタがアポーハ論を批判する箇所の校訂を四つの論文で発表した。いずれも従来用いられていなかったサンスクリット写本を用いた校訂本であり、従来の刊本の不備を大幅に正すものである。その中で、ジャヤンタのアポーハ論の見方が、赤松史観とそぐわない点があることに気が付いた。ジャヤンタが『論理の花房』において描くアポーハ論の発展史と、これまでの先行研究で示されたアポーハ論の発展史とは、果たして合致するのか、あるいは、矛盾するのか、矛盾するならば、いかなる説明が可能なのか。以上の思想史上の問題を解決するために、一次資料の解読作業として、まずは、『論理の花房』の詳細な訳注研究が必要となる。報告者は、自身が批判校訂した『論理の花房』の新規校訂本に基づいて、詳細な注記を付した和訳の作成を目的として研究を開始した。

(3) アポーハ論の展開に関しては、ディグナーガからクマーリラへの展開がまず注目すべき第一の展開となる。次に、クマーリラからダルマキールティへの展開が考えられる。また、ダルマキールティ以後の展開、特に、シャーンタラクシタやシャーンタラクシタといった所謂肯定論者への発展が予想される。そして、それと対立する形で登場すると思われるダルモッタラ説の再検討が必要となる。また、ダルモッタラ説を前提にしながら、その説を批判するジャヤンタなどのバラモン教の論師、さらには、ジャヤンタ以降と目されるスチャリタ、ヴァーチャスパティミシュラの批判を正確に読み直す作業が必要となる。その上で、スチャリタなどを批判するジ

ユナーナシュリーミトラやラトナキールティの見方を再評価する必要がある。報告者は、ジャヤンタを研究の中心に据えながら、ジャヤンタの依拠するクマーリラも同時に視野に収め、彼らの視点から、ディグナーガ、ダルマキールティ（および後継者たち）、ダルモッタラといった論師達の考えるアポーハ論の展開を追うことを目的とした。バラモン教文献から、アポーハ発展史を見直すことが本研究の目標である。

### 3. 研究の方法

(1) ジャヤンタの「アポーハ論」章については、服部正明による紹介が既に先行研究として存在する。しかし、それは、既刊の校訂本に基づくものである。『論理の花房』に関しては、報告者の一連の校訂研究に示されているように、写本によるテキストの改善が可能であり、また、必要である。特に、マイソール版の第二巻については、校訂に過誤が多く、写本を参照し、新たな校訂テキストを作成することが、研究の上では必須の前提作業となる。報告者は、一連の校訂本において、テキストがいかに改善されるかを、いちいちの事例を挙げて例示している。新たな訳注研究は、この新規校訂本に基づく。

(2) 訳注研究にあたっては、ジャヤンタの意図を明確にするために、パラグラフ間の関係を明示するための科段 (synopsis) を作成した。これにより、各段落におけるジャヤンタの構成意図が明確となる。このような作業は、ジャヤンタがアポーハ論の展開をどのように考えているのか、特に、ディグナーガ説、ダルマキールティ説、ダルモッタラ説を分けて記述しているジャヤンタの歴史観を明らかにするために必須の前提作業である。

(3) また、訳注作成にあたっては、ジャヤンタの記述に基づく先行資料を明らかにすることに努めた。ディグナーガ、クマーリラ、ダルマキールティ、ダルモッタラといった論師の著作に見られる平行句を詳細に跡付けた。これにより、ジャヤンタが紹介するアポーハ論の思想的背景が明らかとなる。ジャヤンタの歴史観を、実際の資料に照らし合わせて客観的に評価するために、このような資料の裏取り作業が欠かせない。

(4) ジャヤンタは、クマーリラによるディグナーガ説批判を、詳細に紹介している。報告者は、ディグナーガからクマーリラに至るアポーハ論の展開を追った。従来、ディグナーガ説については、チベット語資料を主資料とした研究が主であった。報告者は、Pind の最新の原典研究を踏まえ、また、クマーリラによる批判を踏まえた上で、サンスクリット資料を用いて、ディグナーガとクマーリラの対立点を明らかにするとともに、ディグナーガの意図を明らかにすることに努めた。従来の

チベット語資料を中心とするディグナーガ説の再構成に加えて、サンスクリット資料（原典および仏教外の文献）によるディグナーガ説の再構成という方法論である。

(5) ジャヤンタが批判するダルモッタラ説については、既述のように、これまで、チベット語訳のみが現存し、その説を正確に再構成するためには、ジャヤンタなどのサンスクリット資料の正確な解読が必要となる。報告者の訳注研究はそのための資料となる。この訳注研究に基づきながら、報告者は、ダルモッタラの位置付けを見直す作業を行った。すなわち、ダルマキールティおよび彼に近いシャーキャブッディ、そこから発展してくるシャーンタラクシタ説と、それに対抗する形で登場するダルモッタラ説の歴史的な位置付けである。さらに、ジャヤンタの批判から浮かび上がるダルモッタラ説の真の姿について、先行研究であるフラウワルナーや赤松明彦の見解が正しいのかどうかを再検討した。ジャヤンタの『論理の花房』の解読作業を通じた、ダルモッタラの思想史上の位置付けの見直しという作業である。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究の主な成果

報告者の研究成果は、三種類に分けることができる。まず、ジャヤンタの『論理の花房』の詳細な訳注研究である。いずれも九州大学文学部の紀要において三年に渡って掲載した。単なる訳注に終わるものではなく、解題も付し、関連する問題について詳しく論じた。次に、思想史上の関連する問題については、学会で発表すると共に、個別の論文にまとめた。ディグナーガ、および、ダルモッタラの見解について、その位相を明らかにするものである。最後に、ジャヤンタの見方が、彼以外の論師にも共通して見られることを示すために、スチャリタのアポーハ批判を、原典から校訂した。この原典はこれまで未出版であり、本稿が世界初の校訂本である。

#### (2) 得られた成果の位置付け

ジャヤンタの『論理の花房』および関連資料を丹念に再検討する中で、以下の諸点について報告者は、先行研究と異なる新たな見方を提示している。

ダルマキールティ、および、ダルマキールティに従うシャーキャブッディとは異なり、ダルモッタラは認識内の形象の動きをアポーハ論においては全く認めていない。この点について、代表的な研究であるフラウワルナーや赤松明彦は、ダルモッタラにおいても認識内の形象が一定の役割を果たしていることを認めている。報告者は、ジャヤンタおよびダルモッタラの『アポーハ論』チベット語訳に基づきながら、このような先行研究の見方がいかに不適切であるかを詳細に論じた。

フラウワルナーは、ダルモッタラのアポー八論を、本質的にダルマキールティ説と同じものと見なしている。しかし、このような見方は、錯誤論に基づきながら両説を峻別するジャヤンタの見方に明確に反するものである。すなわち、ジャヤンタは、ダルマキールティ説を「認識それ自体の現れ」説と考え、いっぽう、ダルモッタラ説を「非有の現れ」説と考えている。すなわち、分別知の対象を、認識内形象とするか虚偽形象とするかの違いがある。

ダルモッタラの鍵概念である *aropita* を、フラウワルナーや赤松明彦は「付託されたもの」(外界対象の上に認識内の形象を付託したもの、あるいは、認識内の形象に外界対象性を付託したもの)と解釈してきたが、「虚構されたもの」と解釈すべきである。これは、ダルモッタラの *aropita* が、ダルモッタラ自身によってもまた他の論者(例えばジャヤンタやスチャリタ)によっても「虚偽」「非真実」と形容されることと合致する解釈である。いっぽう「付託されたもの」と解釈することは、ダルモッタラの体系に合致しない。

ダルモッタラは、ダルマキールティの *adhyavasaya* ([認識内形象を外界対象と]思い込むこと)を、*grahana* (~として把握すること)、*karana* (~にすること)、*yojana* (~に結び付けること)、*samaropa* (~の上に載せること)とする四解釈のいずれをも批判し否定している。特に最後の付託説については、異時付託説と同時付託説の二つに分けて考察し、いずれも否定している。いっぽう赤松明彦は、最後の同時付託説をダルモッタラ自身の説と考えている。この点についても、報告者は、赤松明彦の見解が、ジャヤンタおよびダルモッタラの原典資料に照らして如何に不適切かを詳細に論じた。

ラトナキールティ流のアポー八史観にもとづく赤松史観では、ジャヤンタとスチャリタの見方を説明できない。すなわち、ダルモッタラ以降のアポー八論を見る場合には、認識内形象説と虚構形象説の対立という大枠を考える必要がある。報告者の見方は、ジャヤンタの歴史観に基づきながら、従来の代用的な歴史観である赤松史観に訂正を迫るものである。

このような対立軸の背景には、実は、唯識における二つの相反する考え方である形象真実論(形象が真に存在する)と形象虚偽論の対立がある。形象論とアポー八論の密接な関係は、ラトナキールティが、形象論においてアポー八論に言及することからも確認できる。形象論との関連について、これまでアポー八論研究の文脈では注目されたことがなかった。今後の研究において、注目すべき

視点を提示するものである。

吉水清孝は、喉袋を持たないこと・角を持たないことなどから重層的に非牛が排除されていくことをディグナーガのアポー八論における排除の本質とみなしている。これにたいして筆者は二本の論文を日本印度学仏教学会で発表し、同雑誌に掲載している。2013年の論文では、吉水清孝が原典根拠とみなす箇所が、ディグナーガ自身の説を記述したのではなく、ディグナーガの論敵であるサーンキヤ学者のマーダヴァの説に言及するものであることを指摘した。すなわち、喉袋等の特徴を「牛」という語の適用根拠とみなすのはサーンキヤ学者マーダヴァであってディグナーガではない。ディグナーガ自身の見解はあくまでも、非牛の排除が「牛」という語の適用根拠だというものである。言い換えれば、意義素の意味論を説いたのは、サーンキヤ学者のマーダヴァであって、ディグナーガではないのである。吉水清孝は敵説と自説とを取り違えてしまっている。

また、吉水清孝が一つの論拠とするディグナーガの記述に「有角性」への言及がある。そこでディグナーガは「角を持つから非馬である」と明言している。しかしよく文脈を確かめるとこれは、吉水清孝の意図するような文脈にはない。すなわち、ここでは「牛」という語から牛を理解する語意理解のプロセスが論じられているのではない。そうではなく、角だけが見えた時に推論によって馬が排除されることが例として挙げられているだけである。語の機能が、推論と同じように、他者の排除にあることの例として、角を見て馬を排除する例をディグナーガは挙げているだけである。拙速にもこれを「牛」という語から馬を排除することで牛を理解する語意理解のプロセスそのものだと吉水清孝は見なしたが、それは、原文の文脈の取り違いでしかない。このことについては、2012年の論文で指摘した。

### (3) 研究成果のインパクト

本研究の成果は、アポー八論の展開について、1980年代に固まった先行研究の見方に大きな訂正を迫るものである。今後、特に、ダルモッタラの思想史上の位置付けについて、報告者の新見解が妥当かどうかの検討が始まることになる。既に、石田尚敬は、2013年の学会において、報告者の見方を取り上げ、それとは異なる見方を提示し始めている。報告者の研究に賛成するにせよ反対するにせよ、本研究成果への言及が今後のアポー八論史、特に、ダルモッタラ研究においては、必須となることが予想される。

報告者の作成した『論理の花房』の校訂本に基づく国際研究集会在、2012年4月16日~20日、オーストリア科学アカデミーのIKGA

で、アポーハ・ワークショップとして行われた。報告者も参加した。いずれ出版されるであろう英文の成果報告本には、Alex Watsonとの共著の形で報告者による英訳が掲載される予定である。和訳を主成果とする本研究の同時並行の副産物として英訳が生まれた。信頼すべき翻訳（和訳・英訳）が用意されることで、今後、アポーハ論研究において、報告者の校訂・翻訳したジャヤンタの『論理の花房』が重要な資料として活用されることが予想される。

スチャリタミシュラの『カーシカー』の「アポーハ論」章については、従来、原典が未公開であった。報告者は、四写本に基づき原典校訂を行い、序にあたる最初の部分を出版した。これは、ジャヤンタの見方を裏付ける資料として極めて貴重なものである。今後、ダルモッタラ以降、ジュニャーナシュリーミトラ以前のアポーハ論の展開を跡付ける上で必要不可欠の資料として用いられるであろう。

ディグナーガのアポーハ論に関しては、Pindの研究成果を批判的に用いながら、今後、部分修正が随所に迫られることになると思われる。報告者の論文二篇は、Pindの提示した原典資料に基づきながら、従来の見方を訂正するものである。今後、サンスクリット語資料に基づくディグナーガの見解の正確な理解が後に続くと思われる。

#### (4)今後の展望

ディグナーガからクマーリラへの展開について、Pindの回収したサンスクリット語資料を用いながら、クマーリラのアポーハ論批判も参照して客観的にディグナーガのアポーハ論の性格を見直す作業を行うべき時期にある。すなわち、ディグナーガをクマーリラから見直すという作業である。

ダルモッタラ思想史上の位置付けについては、今後、報告者の提示した見方を中心に、従来の見方を如何に訂正すべきかの議論が続くことになると思われる。石田尚敬の異論について、報告者は反論を準備中である。

ウィーン国際研究集会の成果報告本がいずれ出版されるはずである。日本人研究者も多く寄稿する。従来、日本と海外とのアポーハ論研究の進展にはズレがあり、1980年代に赤松明彦らを推進力として本邦の研究水準が飛躍的に高まったのに対して、海外の研究は、日本語論文をフォローしていない場合も多く、必ずしも最新の研究成果を反映しているとは言えない嫌いがあった。国際研究集会や国際学会を通じて、最新の研究成果について共有する必要がある。報告者の英語論文も、そのような日本語世界と英語世界との間の溝を埋めるものとなるはずである。

本研究が扱ったのは、ジャヤンタから見た、ディグナーガからダルモッタラにアポーハ論の流れである。今後、ダルモッタラ以後のアポーハ論の展開、特に、プラジュニャーカラグプタ等の論師が、ダルモッタラをどのように批判したのか、ジュニャーナシュリーミトラに至るまでの仏教論理学内部での発展を跡付ける作業が必要となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

片岡啓, ジャヤンタの普遍論 Nyayamanjari 和訳, 哲学年報 (九州大学文学部), 査読無, 73 巻, 2014 年, pp. 37 - 93

Kei Kataoka, Sucaritamisra's Critique of Apoha: A Critical Edition of Kasika ad Slokavarttika apoha v.1, The Memoirs of Institute for Advanced Studies on Asia, 査読無, Vol. 165, 2014, pp. 362(1) - 289(74).

片岡啓, 牛の認識は何に基づくのか? ディグナーガのアポーハ論

印度学仏教学研究, 査読有, 62 巻, 1 号, 2013 年, pp. 448(81) - 441(88)

片岡啓, Dharmottara は Apoha 論で何を否定したのか?, 南アジア古典学, 査読有, 8 巻, 2013 年, pp. 51 - 73.

片岡啓, 『ニヤーヤ・マンジャリ』「仏教のアポーハ論」章和訳, 哲学年報 (九州大学文学部), 査読無, 72 巻, 2013 年, pp. 1 - 45

片岡啓, アポーハとは何か?, インド論理学研究, 査読無, 5 巻, 2012 年, pp. 109-134

片岡啓, ディグナーガの意味論をめぐって 有角性による推論の位置付け, 印度学仏教学研究, 査読有, 61 巻, 1 号, 2012 年, pp. 425(94)-419(100)

片岡啓, アポーハ論批判 Nyayamanjari 「クマーリラのアポーハ批判」章和訳, 哲学年報, 査読無, 71 巻, 2012, pp. 47 - 85

[学会発表](計 2 件)

片岡啓, 牛の認識は何に基づくのか? ディグナーガのアポーハ論, 日本印度学仏教学会第 64 回学術大会, 2013 年 8 月 31 日, 島根県民会館 (松江市)

片岡啓, ディグナーガの意味論をめぐって 有角性による推論の位置付け, 日本印度学仏教学会第 63 回学術大会, 2012 年 7 月 1 日, 鶴見大学

(横浜市鶴見区)

〔図書〕(計 1 件)

片岡啓他, 春秋社, シリーズ大乘仏教  
9 認識論と論理学, 2012, 189 - 226

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片岡 啓 (KATAOKA, Kei)  
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授  
研究者番号: 60334273